

少子化とセクシュアリティ

— 性行動調査の歴史と課題 —

Low fertility and sexuality: What can we learn from sexual behavior surveys?

佐藤龍三郎 (中央大学)

Ryuzaburo SATO (Chuo University)

sato.ryuzaburo@gmail.com

日本の少子化の要因については既に多くの研究があるが、セクシュアリティの視点からの議論はまだ少ない。セクシュアリティと出生力の関わりに関する研究主題は、主に①妊孕力（環境やライフスタイルが生殖過程に及ぼす影響）、②性行動、③配偶（パートナーシップ）行動、④出生調節行動（避妊、人工妊娠中絶、逆に不妊への取り組み）からなる（②と③はかなり重複するが、いちおう別立て）。本報告では、このうち性行動に着目し、既存資料・文献を基に以下の点について検討する。

（1）世界の性行動調査の歴史的流れ

第二次世界大戦後「人口爆発」への危機感から、家族計画プログラムの推進や評価に資すべく、出生力調査が盛んに実施されたが、そこでの関心は夫婦の出生行動や避妊行動であった。一方 1960 年代頃から始まった性革命により婚前の性行動が活発化すると、青少年の性行動調査が始まった。1980 年代のエイズの世界的流行は、性行動の調査・研究を促した。近年は、先進諸国の少子化と性の多様化（セックスレス、セクシュアル・マイノリティの顕在化など）の動きを受けて、性行動調査にもより広い視点が求められている。

（2）日本の性行動調査と示唆される性行動の変化

全国人口対象の標本調査で性行動を主なテーマに継続的に実施されているのは「男女の生活と意識に関する調査」（2002～2016 年）が唯一である。「出生動向基本調査」（1987～2015 年）、日本版総合的社会調査（JGSS-2000, 2001）、「仕事と家族」全国調査にも性行動に関する設問が含まれている。単発では「日本人の HIV/STD 関連知識、性行動、性意識についての全国調査」（1999 年）、NHK「性についての実態調査」（1999 年）などがある。中学生・高校生・大学生対象では「青少年の性行動全国調査」（1974～2017 年）がある。

これらの調査結果において、21 世紀に入って、性交開始年齢の（従来の低年齢化から一転して）高年齢化、未婚者の性交経験割合低下、セックスレス・カップルの割合上昇などが見られている。つまり総じて日本人の「セックス離れ」傾向がうかがえる。

（3）性行動の変化と少子化

セクシュアリティと出生力の関係は複雑であり、ただちに「セックス離れ」が少子化の有力な要因とは言いきれない。別の要因（たとえば歴史的文化的背景）が、性行動と配偶行動の双方に影響を与えている可能性もある。また「性の多様化」をより包括的な現象と捉え、実は少子化・未婚化もその表れの一つとして理解すべきなのかもしれない。